年頭のごあいさつ
森林研究本部『林産試験場』の役割
－川上と川下の拮抗関係をこえる－

林産試験場長　菊地伸一

2017年を迎え，皆さまに謹んでご挨拶を申し上げます。

林産試験場は，約2,000億円規模にのぼる木材・木製品・家具等製造業の振興に向け，たとえば道産原木が，どの分野で，どの程度使用され，どの程度の経済価値を生んでいるのかを把握し，その数値を増やすことを念頭においた研究を進めています。もとより，研究に取り組む必要性は，現在の産業規模だけで評価されるものではありません。現時点では小さい，もしくは産業として成立していなくても将来の発展可能性が見いだせるものについては，積極的に取り上げようとしています。ですが，基本的な姿勢は，

1)誰が，いつまでに，その課題の解決を望んでいるのか，

2)どのように道内産業の発展と雇用の増大につながるのか，

3)対象となる産業が具体的に想定されているのか，を問いながら，研究開発を進めることにあります。

木材産業の振興に尽くすという林産試験場の姿勢は一貫していますが，木材産業を巡る状況は常に変化しています。もっとも大きな変化は，人工林資源の充実にあります。これに対応するかたちで，林産試験場でも，道内人工林資源に目を向けた研究課題が主体となり，原料を産出する道内林業を強く意識し，そことのかかわりを持つことが多くなってきています。木材に関する研究が林業をも視野に入れて展開しなければいけないという状況は，たとえば大学附属研究機関として国内で唯一木材に特化した，秋田県立大学木材高度加工研究所においても，「守備範囲を川上側に広げざるをえなくなっている」と述べているところです。組織として行う研究活動の効果を高めるため，状況に応じた研究の重点化を図ることは必要なことと考えています。

３年ほど前，道総研発足以降の林産試験場について，次のように紹介したことがあります。

「林産試験場と林業試験場が森林研究本部という一つ屋根の下に入ったことによる変化の一つとして，研究職員の交流が行われるようになったことがある」

「森林研究本部では，森林資源を素材生産から木材加工そして建築物への利用という一貫した流れの中で考え，成果を出してきた」

「これからも，両試験場が結びつくことによって優れた成果が生み出されることが期待される」

これは，林業と木材産業とが結びつき，共に発展していくことへの期待を込め，私たちの研究開発に取り組む姿勢を述べたものです。つけ加えると，両試験場間の人材交流はその後も順調に進み，昨年は，水源を涵養したり，災害を防いだりする森林の公益的機能や環境保全機能を担当してきた林業試験場研究者が林産試験場に配置され，原料供給以外の機能にも目を向けながら研究を進めていきたいと考えています。

現実には，「川上は立木を高く売りたい，これに対して川下は立木，丸太を安く買いたい。川上と川下は拮抗関係」という指摘を目にすることもあります。これは，たとえば新たな木質材料の製造システムに関する研究に取り組む中で，木質材料の原価構成に占める原木費のウェイトを分析する際に感じることと共通しています。

林業と木材産業が共に発展する理念は間違っていないと考えていますが，その実現プロセス，具体的な手だては模索中です。私たちは，原料生産から加工までを森林研究本部という一つの組織内で一貫して扱える仕組みを生かし，川上－川下の拮抗関係を乗りこえ，課題解決を図っていきたいと考えています。

引き続き，林産試験場へのご支援・ご協力を，そしてさらなるご鞭撻を心からお願い申し上げます。

本年が，北海道の森林・林業・木材産業にとって希望の持てる年となりますように。皆様の発展の年となりますように。